
そして僕は途方に暮れる。

美吉鸕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして僕は途方に暮れる。

【Nコード】

N8597D

【作者名】

美吉鸕

【あらすじ】

半陰陽（両性具有）である紺野和美と、一人の男子生徒との交流が織り成す中学生生活の甘く切ないエピソード・・・

ハジマリ

今日は入学式に相応しい快晴だ。

先日まで小学生だった僕は、この私立成城中学せいじょうに入学する。

僕。仲原卓也はこれからの中学生生活に期待を膨らませつつ、桜並木の校門を抜けた。

中学の頃からメタボな体系だけど、そんな事は気にしない。

周りから見れば、かなり愛嬌があるらしいので。持ち前の明るさと人当たりの良さ（と言うか、世渡り上手？）で乗り切るつもりだ。

ちなみにこの学校は中学には珍しく、

県内優良の企業が経営するエリート男子校だから、当然ここには女の子は居ない。

教室に入ると、そこは既に汗臭い体育会系の野郎だらけだった。

やはり男連中だと教室内は騒々しい。

僕は黒板に張ってある席順を参考に、僕の定位置を示す席へと向かう。

（やっぱり男ばかりだと汗で教室にカビが生えそうだなあ・・・）

僕の席は左側窓側の前から3番目だ。

周囲の生徒はスポーツか何かしてたのだろう、髪型は坊主かスポーツ刈だ。

そんな中、右斜め前に座ってる比較的背の低い生徒が居た。

明らかに周りの生徒達とは雰囲気違った。彼は文庫本サイズの様な小説らしい本を読んでいた。髪は少し長めで、やけに色白だ。

（変った生徒だなあ・・・）

これが彼、紺野和美こんのかずみとの出逢いだった。

入学式が終わり、僕達は教室へと戻るとお約束のホームルームとなり、

左側から一人一人、教卓に立って自己紹介が始まった。

（ああ、めんどくさいなあ・・・）

僕に順番が廻ると、自分の体系を揶揄^{はや}して自虐的に紹介をする。教室内はドツと笑いで溢れ返り、自分でも好印象を与えたんじゃないかと思う。

（まあ、これからの学校生活の為、印象は良くしておかないとね）

そして、あの紺野和美に順番が廻ってきた。

彼はスツと席を立つと、髪を両耳に掻き分けながら教卓へと向かった。

彼が教卓に立った瞬間、教室内がざわつき始めた。

先生の「静かにしろ！！」の合図で教室内は再びシーンと静かになる。

なぜ、みんなが騒がしくなったのか？

その理由は・・・

彼の大きな瞳。子顔な丸っこい輪郭に赤く口紅を付けたかのような唇。

緊張の為か少し赤らめた頬、はにかむ姿は『女の子』そのものだったからだ。

驚きだった。

正しく、美少年とも言つべきその顔立ちにみんなびっくりしていた。

「初めまして、僕は紺野和美と言います。この学校に入る前は病気で長い間入院していたので、殆ど友達とか出来ませんでした。

だからこの機会に色々な人と仲良くなりたいと思っています。

みんな宜しく。」

彼は一礼すると、席へと戻って来た。

席に戻る時に僕と一瞬目が合ったように感じ、少し微笑んでくれた様な気がした・・・。

その日の学校はお昼で終わり、みんなそれぞれ帰宅の途について行った。

僕はその日知り合った友達2人と、『親睦会』へ行こうとしていた。そして、あの紺野和美も帰ろうとしている所だった。

僕は挨拶代わりに彼を誘ってみようと声を掛ける。

「ねえ、紺野君。僕達これから親睦会と言う名の『お茶会』に行くんだけど、一緒にどうかな？」

彼は手で頭を掻きながら少し困った様な顔をして、こう言った。

「仲原クン、ありがとう。」

でもごめんね。これから病院に行かなくちゃならないんだ。」

また、その彼の仕草になぜかドキッとさせられる。

自分で言うのもなんだけど、女の子の前でだじろく感じに似ていた。「ああ、そうなんだ。でもこれから病院って何処か具合でも悪いの？」

僕はそう言っ、直ぐに聞いてはいけない事を聞いたようにな気がして少し焦った。

「・・・今は大した事は無いんだけど、今まで貧血が酷かったから今日はそのお薬を取りに行かないといけないんだ。」

彼は申し分け無さそうにそう言っ、鞆を持って教室を出て行っった。(貧血?・・・良く判んないけど何か事情があるみたいだな・・・)僕はその後『お茶会』を行うべく、友達と近くのファミレスへ向かった。

ファミレスでは既に同じ事を考えてたと思われる学生集団が何組かあった。

この街はそんなに都会ではないので、お喋りする場所と言えばファミレスか、中規模くらいのショッピングセンターくらいしかない。

当然、カラオケなんて言う娯楽施設も無い。

端的に言つと、「市」なのにその人口は2万人にも達していない街だ。

僕はカフェオレ3つを頼むと、いかにもオタク風な彼らとお喋りに興じる。

別に隠す事は無いんだけど僕たち3人は、無類のアニメオタクという共通点で

構成されている。類は共を呼ぶとは言うが、正にこの事を言うのだろつ。

「やっぱり女の子は二次元だよね〜、。。。最高!!!。。。俺の嫁〜！」

と言つてゐる彼は僕によく似た体型でメガネの熊井君。

普通に一般人が聞くと『きもい』んだろつけど、そんな事は割愛する。

自分の世界にどっぷり浸かつてるところを見ると、かなりの筋金入りだな。

「ここからメイドカフェに行くには電車を乗り継ぎ、2時間掛けないと

行けないとは、悲しいよね〜」

この無類のアニメ好きは田中君。柔道をしてた割には妙にデレデレしている。

僕は次の土日にオタクグッズやコミックを扱うショップへ行こうと思つていたので、

彼らを誘つてみる事にした。

「所でさあ、せっかくだから今度の週末にショップに行かないか？」

「おお〜、ショップかあ。」

ショップと言つて通じる所がオタクらしい。

「いいなあ、それ。ついでにメイドカフェにも行つてみたいよな。」

田中君はどうやらそつち系がお好みらしい・・・

「じゃあ、土曜日に待ち合わせして行こうよ。」

「さんせうい。」

僕達はその後、自分達が所有しているコレクションについて語り合
うのであった。

友達

今日の二時限目は体育だ。でも、あの紺野和美は見学だった。

（やっぱり何かの病気なのかな？ちよつと気になるなあ）

体育は昔から苦手だ。

なんであんなに一生懸命走らなきゃならないんだ。

自分のメタボな体系をちよつぱり悔やむ。

僕はあの自己紹介の一件以来、クラスのムードメーカー的な存在に
なっていた。

もちろんお陰様で友達も増えた。

しかし、紺野和美だけはなぜか誰とも打ち解けられないようで
休憩時間や昼食時は1人で居る事が多かった。

「少し可愛そうな奴だな……………」

授業が終わると、僕は纏わりつく野郎共から逃げるようにして
紺野和美の所へと向かった。

僕はスタンドを勢い良く駆け上がったおかげで、息が切れ切れにな
った…………

「…………ハアハア…………紺野君、教室…………戻ろつよ」

彼はそんな僕を見て笑った。

「あハハ、仲原君。授業であんなに走ったのに、

無茶してスタンド駆け上がるからだよ」

ん？なんで知ってんの？

あ、そうか。スタンドから見てたんだっけ？

「僕。体育は苦手なんだよねー、このカモシカのような足には堪える
よ。」
こたえる

僕は短パン姿の大根足を指差しながら彼と笑いあった。

教室へ戻る間、彼の体調の事や、中々友達が出来ない愚痴？を聞くことが出来た。

「仲原君はいいなあ。元気そうで、すごく羨ましいよ。」

彼は少し俯き加減うつむきかげんにそう言うのと、

自分の胸を擦るような仕草をした。

僕は言葉を一つ一つ選びながらこう応えた。

「個人的に何か事情があるんだとは思うけど、僕はそれを聞いたからって

気にしたりしないし、無理に聞こうとは思わないから安心していいよ。」

すると彼はニコツと微笑むと静かに話始めた。

「僕は小さい頃から体が弱くって、中学の頃はほとんど病院で過ごしてたんだ。

どんな病気なのかは今では言えないけれど、あと少しで治るって病院の先生が

言ってたから。たぶん大丈夫。

友達が出来ないのは内向的な自分が悪いんだって思ってるし。」

彼はそう話すと申し訳なさそうな顔をした。

「そんな事は無いと思うよ？ 何も恐れる事なんてないし、

本当はみんな君と話たがってるんだよ？」

彼は少し驚いた様な顔をした。

「でも、僕にはその勇気が無いんだ……。」

「大丈夫だって、こうして僕と話てるじゃない。だったら

まずは僕が最初の友達になるからさ！」

そう言いながら、彼の肩をポンツと叩いた。

すると、あの入学式の時見せた微笑を返してきた。

それを見た僕は一瞬、ドキツとする。

「ありがとう、実は僕も仲原君と友達になりたかったんだ。」

「うん、これからの三年間。宜しく！」

僕達は、教室に戻る長いようで短い5分間を、お喋りで楽しんだ。

教室に戻ると早速着替えに入る。

彼のあの微笑む顔が脳裏を過ぎる・・・

上着を脱ぎ、上半身裸になった僕は、ちらつと彼の方を見た。

一瞬目が合うと、彼はハツとしたような顔でクルツと教壇に向きを変えた。

「あれっ？なんで目を逸らしたんだろ？」

なんでかなあと思いつつ、僕は着替えを済ます。

暫くして、オタク衆が教室に戻って来た。

「おいおい、仲原くゝん。なんで先に戻って着替えてんの？」

田中が背筋をスーッと伸ばりながらジャレてくる。

「ヒエーッ、田中。ヤメローッ」

僕は振り向き様に斜め45度チョップを彼に見舞った。

彼はサツとそれを交わす。

僕と同じくメタボな癖に俊敏な奴だ。

「おまいら、いちいちちょっかい出すなーっ!!」

相変わらずこいつらには参る・・・。

お昼休みになると、みんな仲の良い者達で席を囲い、

それぞれの弁当箱を広げあう

というか、お互いのおかずを奪い合う。

僕はいつも1人で弁当を食べている紺野和美の所へと向かった。

「紺野君、こっちにおいでよ。一緒に弁当食べよ。」

彼は少し困ったような顔をしたものの、僕の強引な呼びかけに根気負けしたようだった。

そして、その光景は周りから見ても異様だった。

僕。田中君。熊井君。紺野君。

三人のメタボな野郎に囲まれた席にポツンと少女っぽいのが一人。
なぜか、呼んでもない野郎が一人、二人と椅子を持ってきて中に加

わる。

「おまい達、なんで入って来るんだよ。」

「仲原クーン、いいじゃないか」。こういう時間こそ親睦を深める時じゃないか？」

どうみてもみんなこの機会を伺ってたと思えん。

実は紺野君と仲良くなりたいたいと思ってるのはみんな同じなのだ。

ただ、紺野君の纏うそのオーラに、みんな圧倒されて近付けなかっただけ。

『フツ、小心者達め』

気が付けば、五人増えとる……。

仕方ないので、お互いの弁当を広げて獲物を奪い合う。

可愛そうに、紺野君の弁当はご飯だけになっている。

「おいおい、おまいら！！紺野君のおかずを取るなー！！」

でも、彼はニコニコと微笑んでいた。

「明日はもうちょっと大きいお弁当箱にした方がいいかな？」

それを見た僕は、自分の残っていた出汁巻き玉子を彼の弁当箱へと入れる。

「仲原クン、ありがとう。頂くね。」

彼は嬉しそうな顔をしながら出汁巻き玉子を頬張る。

そんな彼の表情を見ると、こっちまで嬉しくなってくる。

よし、明日はおかずを多めにしてもらおう……。

お昼休みが終わるまでの間、みんなで騒ぎつつお弁当を突付き合った。

紺野君は終始笑顔だった。

こういう時間は本当に楽しい。

彼もやっとみんなと打ち解けたようで、ホツとする。

ハジマリ（後書き）

感想を頂けると、作者は小動物の様に喜びます。
また、連載の励みともなりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

ウワサ

明日から三日間、中間テストだ。

勉強は誰も苦手だと思っただけで、僕は更に苦手だったりする。

明日からテストだっていうのに、家に帰っても全然勉強に身が入らない。

なぜなら、勉強の邪魔をする兵が二匹^{つわもの}。この部屋に居るからだ。

「あつ！こら、田中。そのフィギュア触ったら絶対許さんからね。」
僕は一番お気に入りのフィギュアを死守する。

「いいじゃん。そんなに高いもんじゃないだろう？」

「バカ言っな。これは僕が小学生の時から新聞配達して貯めたお金でやっと買った大事な物なんだぞ！！」

こいつらを部屋に入れるんじゃないかと激しく後悔する。

「ふーん。じゃ、こっちはいいんだよね？」

田中は自分の好みのキャラクターであるフィギュアを手にかけてようとする。

「それは触ってもいいけど、壊すなよ。」

「大丈夫、大丈夫」。そんな簡単に壊れる訳ないつしよ。」

彼は羨望の眼差しでフィギュアを手にとると、恍惚とした表情でそれを見つめる。

彼はどうやら微妙なパンチラが気になるらしい。

「おまいら、明日からテストだぞ！ テスト！」

「別に平均以上取ればいいんだし、それに今から頑張っても無理というものだよ。」

相変わらず熊井は屁理屈が多い。

「平均って、まだ平均点がどのくらいか判らんのに、
どうやって平均以上取れって言うんだよ。」
「それはそうだ。アハハハハハハ！」

こいつら・・・、壊れとる。

「あと30分したら帰ってくれよー、僕は勉強するんだから。」

「ハイハイ、僕達は静かにしてるから、君は勉強したまえ。」

「フツ、おまいら。最下位決定だな。」

「さあ、それはどうか・・・？」

二人がハモる。

キメエ。こいつらキメエ。

絶対、こいつらより良い点取ってやる！！

僕は教科書を開き、今日までの要点を頭に叩き込む。

一時間が経過した時、彼らは自らの家へと帰っていった。

『フーツ、これでやつと静かに勉強に集中出来る。』

その晩は徹夜にはならなかったのだけれど、

度々襲ってくる睡魔には勝てず、僕は短い睡眠を摂る事にした。

翌朝、早く目が覚めた僕は、せっかく勉強した事をすっかり忘れて
るんじゃないか？

と思いつつ、学校へと向かう。

まだ誰も居ないと思っていた教室には、なぜか紺野君の姿があった。

「仲原君、おはよう！！」

「おはよう！ 紺野君今日は早いんだね。やっぱりテストがあるから？」

「そういう訳じゃないけど、僕はいつも早く来るようにしてるんだ。」

「えっ、そうなの？」

「知らなかった。」

いつもギリギリにしか来なかった僕は、彼が一番に来てたなんて思いも寄らなかった。

「僕は中学の頃はずっと病院の中だったから

こうして学校に来れる事がとても嬉しいんだ。

それに、新しい友達も出来て、本当に毎日学校に来るのが楽しくて仕方ないんだよ。」

彼は笑顔で、とても嬉しそうな表情をしていた。

目を丸くして微笑むその少女の様な笑顔にまたドキッ、とさせられる。

当たり前のように平凡に生活してきた僕からは、全く想像も出来ないけれど、

彼にしてみれば、学校に来るという事は平凡な毎日なのでは無く、新鮮な毎日、楽しい毎日なのかもしれない。

ちよっと何か忘れていたものを気付かされた様な気がした。

試験期間中は午前中がテスト、午後に一時間程ホームルームの後に下校となる。

なんとかテストは出来たけど、果たしてうまく出来たかどうかは不明・・・

お昼休みになり、いつものメンバーで席をくっ付け合う。

紺野君はあの日以来、大きめの弁当を持って来るようになっていた。

弁当箱を開けると、なぜか美味しそうなものを真っ先に僕の弁当箱へ入れてくれる。

出来合物では無い、手作りと思われる凝った小さなハンバーグ。妙に手の込んだミニグラタン。

見た目もさる事ながら、これが中々美味い。

「ちえー、なんでいつも仲原だけなんだよー」
毎度の如く文句を言ってるのは田中だ。

「いいじゃん、数少ないんだから。全員食えないのは仕方ないだろっ」

僕はちよっぴり勝ち誇ったように応酬する。

やはり、みんなこの件に関してはとても気になるらしい。

食い物の恨みは恐ろしいから、ぼちぼちみんなにも分けてあげられるように

紺野君にお願いしてみる。

「いつもくれるのは嬉しいんだけど、

たまにはみんなにも分けてあげてくれないかな？」

彼は躊躇する事無くニコニコと答える。

「僕はみんなにも食べてほしいとは思っけど、いつも見てるとみんな仲原君のおかずを取っちゃうから、僕があげるのはごく当然なことだと思うよ。」

そう言われればそうだ。

みんなその事には意義無しという感じだった。

僕は気に掛けてくれてたんだな、と紺野君の優しさにちよっと嬉しくなった。

しかし、あの連中をかくも的確に論破するあたり、
あながち強ち只者ではなさそうだ。
恐るべし紺野君。

食事中はテストの話で盛り上がった。

あんな引つ掛け問題は邪道だとか、人生終わりだとか
訳の判らない事を言う奴が居たり。

こうみんなとワイワイと食事をするのは実に楽しい。

今朝、紺野君が言っていた

『毎日学校に来るのが楽しくて・・・』

この言葉の意味がなんとなく判った気がした。

程なくして、みんなで校内の自動販売機へ行こうと言う事になり、
弁当箱を片付け、総勢十名程でぞろぞろと向かった。

自動販売機は本館の一階に有り、ちょっとした休憩室になっている。
病院の待合室つばいと言う者も居るけど、
学校にこういう落ち着いた場所があるのはとても良い。

休憩室に到着すると、既に何人かの先客が居た。

三年の生徒会の面々だ。

僕達は形式ばかりの挨拶をすると、各々の好きな飲み物を買
いベンチへと腰掛ける。

すると、上級生と思われる連中の一人がこちらに向かって歩いて来
た。

「休憩中済まない、君が一年生の紺野君だね？」

このイケメン生徒は・・・

そつだ、入学式で歓迎の挨拶をした生徒会長だ。

彼は紺野君の前に立つと、180センチは有るであろう体を前かがみにしつつ、紺野君の顔を覗きこむ。

「あ、はい。そうですけど・・・」

紺野君が困ったような顔をする。

「僕は三年の生徒会長をしてる小泉です。お会い出来て光栄です。君の噂は聞いているよ。」

なぜか握手を求めている。

突然の事でびっくりしたのか、紺野君は差し出された方とは逆の腕を差し出す。

「あ、ごめんなさい。紺野です。宜しく。」

「また改めて逢う機会があると思うから、その時は宜しく。」
小泉は両手で紺野君の手を握り、軽く会釈をすると席へと戻って行った。

なんなんだあの人は・・・

紺野君の顔を見ると、流石に面食らったのか苦笑いをしている。

「あー、びっくりした。」

そう言えば入学式以降、紺野君の事は学校でも有名なくらいにとある噂が

広まっていた。

『この学校に女の子みたいな生徒が居る。』

わざわざ彼を見に来る生徒とかも最初の頃は居ただけけど、今はみんな慣れたのか、話題になる事は殆ど無かった。まあ、彼が有名人なのは依然変わりは無いのだけれど。

『改めて逢う機会があると思うから』

とか言ってたけど、何かあるのかな？

僕は疑問に思いつつも、来たメンバーで違う話題に耽っていた。

コドウ

午後の短いホームルームが終わり、みんな帰宅の途に着いていく。今日また、あの二名に部屋に来られるのは本意では無いので、一人そそくさと帰り支度をして教室を出る。

しかし、調度廊下に出た所で紺野君の声に呼び止められた。

「仲原君、ごめん。ちよつと」

「ん？紺野君、呼んだ？」

僕は振り向きつつ、彼の方に向き直る。

「急いでる所ごめんね。実はお願いがあるんだけど・・・

これから仲原君の家に行ってもいいかな？」

僕は少し考える。

うーん。あの二人よりは静かになるのは間違い無い。

というか、彼とプライベートで逢うのは初めてじゃないか？

彼は頭良さそうだし、もしかしたら勉強教えて貰えるかも？

僕はそんな邪な思いを抱きつつ、彼の願いを了承した。

帰り道、話していると彼が意外と近くに住んでる事が判った。

プライベートな事は今まで殆ど話した事が無かったので、

ある意味貴重な情報を得る事が出来た。

そして、家に着く頃には既に勉強の事などどうでも良くなっていた。というか、彼と遊ぶ事しか考えていなかった。

自宅に着き、母親に友達が来た事を伝えたと、自室へと彼を案内する。

僕は暑苦しい上着を脱ぎ、彼にも促して衣文掛けを渡す。

「へえ、いろんな可愛い玩具おもちゃが置いてあるんだね。」

「あのー、これらはオモチャには間違いないんですけどー
これはフィギュアっていう物でしてー。」

彼は普通の人だから知らないのは当たり前と一人納得する。

「あ、そうなんだ。テレビで良く見かけたなあって思ったんだ。」
流石一般人。無理に僕の趣味を享受してもらおうとは思わない。

「無理やり押しかけてごめんね。」

彼はもじもじしながら部屋の周りを見渡している。

僕は小さなちゃぶ台を出して、彼に座るように促した。
しかし、立ち位置が悪かったのか、彼は体勢を崩した。

「あっ！危ないっ！」

僕は咄嗟に彼を抱き抱えるようにして、傍のベッドへと倒れ込んだ。
僕が上になるように倒れ、気付くと彼の顔がとても近くにあった。

「ご、ご、ごめん！大丈夫？」

僕は突然の出来事に焦った。

彼の顔を見ると顔を真っ赤にしながらも、優しい笑みを浮かべていた。

そして、こう呟つぶやいた。

「お願い、もう少し・・・、こうしていてくれないかな・・・。」

彼から離れようとする僕のツヤツの脇を軽く引きながら
彼は離れるのを拒んだ。

僕の心臓はなぜかバクバクと鼓動している。

あの時、入学した日、

彼を見た時に感じた胸の奥がキュンとなる感覚が感じられた。

『なんなんだ・・・この感覚は・・・』

たしかに彼は女の子らしい感じはある。

入学式に初めて彼を見た時、ドキッとした気持ちもまんざら嘘じゃない。

彼の髪から漂う心地良い香りが、僕の顔の周りを包む。

暫くして、彼の腕が僕の体を捕らえる。

僕が彼を抱きとめるといふ感じから、

逆に彼が僕に抱きつくといふ感じが正しいかもしれない。

さながら彼氏が彼女を労わるかの様な・・・

彼の顔に目を移す。

目を瞑り、僕に抱きついたその表情は、

まるで天使のように幸せそうな笑顔に変わっていた。

時折、強く抱きしめるように彼の腕に力が入る。

今まで女の子と付き合った事も無ければ、まともに話した事も無い、
ましてや、初恋なんてものもした事も無い僕は、
彼に、ある種の感情が芽生えた様な錯覚を覚えた。

『・・・まさか彼に、なんだろうこの感情は・・・』

自分が少し信じられなかった。

でも、僕の中で一瞬ではあるけれど、
彼が男であるとか、女じゃないとか、
そんな事はどうでもいいという感じがした。

どれくらい時間が経っただろう・・・

お互い何も話さず、何も交わさず
静かな時間が過ぎていく・・・。

しかし、

もう一人の冷静な自分が囁き、ささやき 静寂を打ち破る。

『このシチュエーションを親に見られたら不味い。もの凄く不味い。』

と思ったが早いか、ドアが開き母親が茶菓子を持って入って来た。

「・・・。」

「あらあら、お母さん御邪魔しちゃったかしらあ・・・
お茶、ココに置いておくわねえ。」

母親はそう言うと、静かに階下へと降りていった。
彼はそんな空気を悟ったのか、僕から離れる。

「う、ごめんなさい！！　僕こんなつもりじゃ」

母親に見られたのは仕方無いとして、彼を責める理由は見当たらない。

なぜなら、原因は『事故』だったのだから。

「あははは、母親が・・・なんか誤解しちゃったみたいだね。」

お互い、離れると急に照れくさくなった。

それから、先ほどまでの出来事を振り払うかのように、

一緒に明日のテスト勉強について教え合った。

帰り際、

お互いどういう感情だったのか、どういう風に思ったのか
確認する間も無く、僕は彼の後ろ姿を見送った。

部屋に戻り、入浴の準備をしてお風呂場へと向かう。
さっと体を洗い、湯船に体を預けた。

あの部屋での出来事が、頭の中でリフレインしている。

『彼に、男に対してあんな感情をもってしまうなんて・・・』

僕は普通じゃないのかな・・・』

僕はザブンツと頭まで一気に浸かった。

カミングアウト

やっと長かった三日間のテスト期間が終わった。

あの日から、紺野君と『あの事』についてはお互い一切触れる事は無かった。

しかし、僕が彼を見る視線は少し変わったような気がする。

彼の表情や行動がとても気になるのだ。

他の生徒と話しているのを見ると、なぜか嫉妬心にも似た感情がしたり

一緒に話している時は、なぜか嬉しくなったり。

女の子が好きな男の子を見る目っていうのは、たぶんこんな感じなのかもしれない・・・。

うーん。僕はこのままでいいんだろうか？

あれは本当に事故で、これは一時の感情に過ぎないのではないのか？

あの時、彼が言った

『もう少し・・・、こうしていてくれないかな』

あの言葉の意味は、本意はなんだっただろう。

自分の都合の良い様にしか解釈出来ない。

でも、直接彼に聞くのはなんだか恥ずかしい。

教室に居る時は、彼はいつもの様に接してくれるし、なんだか変わりは無いように見える。

ひょっとしたら僕の思い違い？勘違いなのかもしれない。

『えーい、考えても埒があかない！

思い切って聞いてみるか！』

僕は放課後、思い切って彼に声を掛けた。

「紺野君ごめん、ちょっといいかな？」

彼は直ぐにやって来た。

「今日は一緒に帰らないかい？」

ニコツと微笑むと、彼は鞆を取りに戻ってきた。

「やっと、テストが終わったねー。」

彼の方から話しかけて来た。

「そ、そうだね。結果が心配だけどね。」

それからの道中は他愛も無い会話を交わしながら、歩いていた。

中々切り出すタイミングが難しい・・・

割と小心者なんだったという自分が齒がゆい。

なんとか僕の家に来てもらえるように話を持っていく事が出来た。

嗚呼、疲れる・・・。

彼はまた僕の家に来れるというので、小動物の様に喜んでいる。

家に到着し、タイミング良く今日は母親が趣味の会合で居ない事を確認すると、

一緒に部屋へと向かった。

「ごめん、ちょっとお茶持ってくるから、楽にしておいて。」

僕は台所で紅茶を煎れる準備をしながら、茶菓子になるような物を物色する。

「おっ、あったあった。」

老舗の煎餅屋さんのお菓子発見。

お湯が沸き、それぞれを御盆に乗せて階段を昇っていく。

「お帰りー」

僕が到着するのと同時に部屋のドアが開いた。

「サンキュー」

そして暫くの間、テレビゲームで対戦してから束の間の休憩をとった。

僕は中々言い出すタイミングが無いので、淒く焦っていた。ふと、彼はティーカップを置くと彼の方から切り出した。

「先日はごめんね。お母さんに見られて大変だったでしょ？」
「ちょうど彼の方から切り出してくれたので、ホッとする。」

「いや、コケそうになってたのを庇ったって言ったら素直に納得してくれだよ。」

「そうなんだ、でも良かったね。」

「まあ良かったのは良かったんだけどね。アハハ・・・」

僕は頭を掻きながら照れ笑いするしかない。

「今日は居ないから大丈夫だね。毎回コケる度に母親に見られたらたまらないよ。」

ふと彼の表情を見る。

なぜか真剣な表情になっている。

「紺野君、どうしたの？」

僕は何か不味い事でも言ったと思い、慌ててフォローする。

「ごめん、僕。何か変な事言っちゃったかな？」

すると彼は真面目な顔で答えた。

「・・・変な事言ってないよ。この間、変な事したのは僕なんだから」

うつ、気まずい。

なんて話したらいいんだ・・・

僕の心臓は早鐘の様に鳴り響いている。

こんな緊張した空気は心臓に悪い。この空気をなんとかしなくちゃ・
・

「仲原君は僕の事、怒ってる？」

「い、いや、全然怒ってなんかいないよ。ほんと。」

極度の緊張の為か、声が裏返ってしまう。

「仲原君は僕の事・・・、どう思ってる？」

彼のほうから聞いてくるとは予想もしていなかった。

「ど、ど、どうおもってるもなにも、アハハ・・・」

声がまともに出ない。だめだ、まともに喋れない。

どうすればいいんだ？

なんて答えればいいんだ？

突然、ベッドに腰掛けていた僕の右隣に彼が座ってきた。

いかん、だめだ、

すでに僕の思考回路は完全にショート寸前だった。

すると彼は静かに話し出した。

「僕の病気の事、まだ話してなかったよね？・・・」

急に訪れたシリアスな展開に思わず片唾を飲んだ。

「そ、そうだね。僕は貧血か何かかと思ってたんだけど。」

「驚かないで聞いて欲しいんだけど・・・、聞いてくれるかな？」

「うん、判った。でも『余命幾ばくか』、なんて話は無しだよ。」

「アハハハ、そんな事ないよ。」

彼はいつもの笑顔でおどけて見せた。

それを見た僕は少し気持ちが落ち着いた気分になった。

「それじゃ、話よりこっちで説明した方が早いよね。」

彼はスツと立ち上がると、上着を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちよつと紺野君、何してんの？」

「いいから、そのまま見てれば判るよ。」

僕は彼の一言で制止させられる。

肌着の状態から、一気に脱いだ彼の胸には、なぜかサラシが巻かれていた。

彼のその透き通るような白い肌に驚く。

彼は後ろに手を廻すと、胸に巻いたサラシを取り始めた。

そして、最後の一枚を胸に当てた状態になると、念を押すように僕に話す。

「恥ずかしいけど、絶対に目を逸らさないでね。」

彼は残された一枚を取り除いた。

「え！？、・・・・・・・・」

そこには、男の子には無いモノが胸にあった。
いや、女の子にあるべきモノがそこにあった、と言うほうが正しいかもしれない。

僕は吃驚^{びっくり}すると言うより、
見てはいけないモノを見てしまったような罪悪感を覚えた。

その二つの隆起したものは、明らかに女性の乳房であり、およそ男には有り得ないモノだ。

「おどろかせちゃった・・・かな？」
彼は恥ずかしそうに、こちらを見ている。

「いや、驚くとかの前にくっちが恥ずかしくなっちゃうよ！」
彼の目には、僕の顔がトマトの様に赤くなっている姿が映ってるに違いない。

僕のは心臓は早鐘のように鳴っている。
寿命が少し縮まったかもしれない。

彼はもう一度サラシを手にとると、胸に巻き始めた。
そして、まるで人事の様に話し始めた。

「僕は半陰陽^{はんいんよう}、『はんおんよう』とも言っただけど、
簡単に言っと、男と女ふたつの性を持った体なんだよ。
僕が生まれた時には、男の子と認識出来るくらいのモノがあったから

そのまま『男』として戸籍に登録されただけけど、

でも、時が経つにつれて体は女の子になっていったんだ。
体育の授業に参加しないのは、別に体が弱いとかそんなことでは
ないんだけど・・・

着替えの時って、誰かに見られる事があるからね、
病弱を装うしか方法が無かったんだ・・・。

子供の頃、自分でも良く判らなかつたんだけどね。

五年生の時に胸が大きくなり始めて、気が付いたんだ。

その時みんなに気付かれてね。それで結構苛められたりしたんだ
よ。」

サラシを元の様に巻き終えると同時に、彼からの「カミングアウト」
が終わる。

「僕は仲原君が信用出来る人だと思ったから、全てを話そうって思
ったんだ。

これで友達解消されても仕方が無いと思ってる。」

彼の顔は、いつになく真剣な表情に変わっていた。

今まで女の子と接した事の無い僕は、彼の姿を目の当たりにして頭
の中が混乱していた。

どう話せばいいのか、正直判らない・・・

でも、こんな事で友達解消なんてのは有り得ないよな・・・。

むしろ理解してあげる事が先決なんじゃないか？

前回、この場で起きた『事件』以来、彼の事が気にかかっているの
は自分も認めるとしても

・ 彼を女の子として見ればいいのか、男の子として見ればいいのか・・・

暫く考え込んでしまった僕に気付いたのか、彼は補足する様に言葉を僕に投げ掛ける。

「体は女の子に近いかも知れないけれど、僕は僕だって思ってる。心はまだどつちなのか自分でも正直判らない。今まで通りに接して欲しいと思うのは僕の我侷わがままかもしれない。ただ、こんなの僕の体を理解してくれる友達が欲しかった・・・それだけなんだ・・・」

彼は目に涙を浮かべ、俯うつむき加減に僕の隣へ腰掛ける。

そして・・・僕は一つの結論に達した。
ここで彼を受け入れなかったら、傷つけてしまう。

「僕は今見た事を他の生徒達には絶対に話さないし、君を見下すような事は決してしない。約束する。
それから、君の秘密を知ったからって、僕は今まで通り何も変わらないよ。」

僕はそつと彼の肩を叩いてあげた。

「ありがとう・・・
本当は仲原君にずっと隠し事してるのがとても辛かったんだ。でも、今日言えて良かったと思ってる。」

彼は僕の方を向くと、あの笑顔を見せてくれた。
またもドキツとする自分に焦る。
なぜか体が女の子だって言うことにホツとしたような、妙な安心感があった。

この時、彼を女の子として見てしまっている自分が居た。

カミングアウト（後書き）

ご意見をお待ちしています。

メッセージを頂くと小動物のように喜びます。

また、続編への意欲が増しますので、
どうぞ宜しくお願いいたします。

思春期

今日から衣替えだ。

この体系にとつて、暑苦しいあの上着から開放されるのはとても嬉しい。

そう言えば、あの中間テストで驚いたのだけれど、紺野君は学年トップになっていた。

気になる僕の成績は・・・60人中12位だった。

田中と熊井は勉強してなかったせいか、やはり最下位近辺に居た。あいつら夏季訓練決定だな。

学校に入ると、夏服に変わった生徒達で賑わっていた。

やっぱり白いシャツは清潔感があっていいな。

教室に入ると、紺野君が既に席に座っていた。

「おはよー」

僕は手をあげながら入室。

周りから「オハヨー、おはようー、オッス」と元気の無い声がこだましてくる。

やっぱり野郎だらけの教室はこんなもんかな？

僕は紺野君の所へ駆け寄ると、借りていたCDを手渡した。

「はい、これ。中々良かったよ。」

「え、もういいの？」

「ちゃんとMP3に落としといたから大丈夫。」

「MP3ってなに？」

先日、彼からカミングアウトを聞いた時、小学校の頃イジメがあつて直ぐにフランスに行ったって聞いていた僕は

「あっそうか、海外生活が長かったから情報遅れてたんだっけ。」

プレイヤーを取り出して彼に見せてみた。

「へえ、こんながあるんだ。知らなかったよ。」

たぶん、彼のハイテクな情報はまだ、平成初期なのかもしれない・・・。

「今度バイトで給料貰ったら、新しいの買ってあげるよ。」

「えー、本当？嬉しいなあ」

ニコニコと満面の笑みを浮かべるその姿は実に微笑ましい。

最近はこの笑顔を見る為に学校へ来てる感じがする。

実は僕、中学の頃から朝は自転車で新聞配達をしている。

ダイエットの為に始めたんだけど、あまり効果無し。

その代わり、そこそこの給料を貰えるので小遣いが少なくて困るというのが無い。

でも、親から小遣いをもらってないので、バイトを辞めたらどうなるのか

とても不安ではある。

今日の体育はプールの掃除だ。

毎年、この季節になると一年生が掃除担当なのだそうだ。

僕達は夏用の半袖半パンに着替える。

今日は珍しく、紺野君も着替えている。

僕はその姿にしばし見とれていた。

『・・・なんて綺麗なんだろう・・・』

穢れの無い、透き通るような白い肌にしばし見惚れる。

確実に女の子に間違えられても不思議ではない。

「仲原君、なに人の着替え見てるの？」

あ。バレた。

彼は顔を赤らめつつ、恥ずかしそうにしている。

「いやあ、実に貴重な物を拝見させてもらいました。」

彼の、猫の肉球のようなパンチをお腹にお見舞いされる。

「拝観料千円ねっ。」

と、手の平を差し出す。

「冗談だよー」

彼はくるつと身軽な体を捻らせて教室を飛び出して行く。

本当に彼は子猫みたいで可愛い。

さて、僕も行かないと先生に怒られちゃうな。

プールは既に水が抜かれ、一年間で溜まったであろうゴミが散乱していた。

体力の有る者は、プール内のゴミ拾いと長い柄の付いたブラシでプールを掃除する。

体力の無い者は、ゴミを運んだり、プールの周りの雑草を取ったりしている。

真面目にする者は皆無んだけど、

先生の目があるので、みんなそれなりに掃除をしている。ある程度綺麗になった所で、10センチ程水が溜められ、僕達力自慢は思いつき水を壁面に当てる掃除する。

『はあ、草取り組の方が良かったなあ』

最後にみんな上に這い上がり、綺麗に水が張られていく。次第に水面が波打ち、キラキラと日の光が反射し始める。

さつき教室で見た、紺野君の体もそんな感じだったかな。

『穢れの無い体』

別に厭らしい感情は無い、彼が許すならちよつとだけ触ってみたい
と思った。

まあ結局は怒られるんだろうけどね。

「おい、仲原―」

熊井が大きな声で僕を呼ぶ。

「なんだよ大声で、ちゃんと聞こえてるって。」

熊井は少し首を傾げた

「あれっ、さつきから何度もお前の事呼んだんだぞ。」

「あ、ああ。ごめん。考え事してたんだよ。」

「考え事、お前悩むような性格と体型じゃないだろ？」

言われる事は、強ち間違つてはいない。

「ところで何の用だよ。」

熊井は申し訳なさそうな顔であるジェスチャーをする。

「それ、なんの真似だよ。どじょうすくいかな？」

「鈍感だなあ、草取りした雑草を焼却炉に持って行って欲しいんだ。」

「なんで僕なんだよ。」

「これ持ってみろって、土が付いてるから結構重いんだよ。」

「しょうがないなあ―」

僕は山盛りに積まれた大きなリヤカーを引っ張りながら
焼却炉のある場所へと向かった。

道中、紺野君のあの姿が頭から離れなかった。

『なんなんだ？別に欲求不満って訳じゃないのに・・・』

途中、紺野君が走ってやって来た。

「おいおい、走って大丈夫なのか？」

「ちょ、ちよっとだけなら大丈夫だよ。」

完全に息を切らしている。

「無理しちゃダメだよ。何かあつたら僕が怒られるんだから。」

「ごめん、ごめん。もう大丈夫。」

前かがみになって息つきながら、髪を揺らす姿はまるで女子高生みたいだ。

焼却炉に着いた僕達は、草を乾燥させる倉庫にそれを流し込んだ。

「ふうーっ、終わったー」

僕は汗だくになっていた。

リヤカーをあるべき場所に戻し、プールへと向かう。

「疲れたでしょ？」

紺野君が僕の疲労困憊した顔を見て心配している。

「疲れたつてもんじゃないよ。あれだけプールでゴシゴシした後にあの荷物だよ？」

三步先を両腕を後ろに組んだ紺野君が歩く。

ふと、彼の腰に目が行ってしまう。

体は凄く疲れているのに、なぜか無性に彼を抱きたいという衝動に駆られる。

『いかん、いかん、なんでこんな時にそんな事思っただ？』

自分の中で訳の判らない葛藤が始まる。

やっこの思いで葛藤との戦いを終え、プールへと到着。

紺野君は着替えがあるからと、先に教室へと戻って行った。

プール掃除組の僕達は、先生の許可をもらいシャワールームで汗だくになった体を洗う。

上から滴り落ちてくる冷たい水を勢い良く顔に当てる。

頭の中はなぜか紺野君の体でいっぱいになる。

すると体全体が萎縮した感じになり、

お腹から下から電気でも走ったかのような衝撃があった。

「ウツ・・・」

下半身が脈打つ感覚と共に、快感が体を走った。

『・・・とても気持ちいい・・・』

僕はこの時初めて紺野君に対して欲情し、生まれて初めて精通した。

ふと我に返り、例え頭の中であつてもあの紺野君に対して欲情した事に

汚らわしさと罪悪感で頭の中が満たされてくる。

「いったい僕は何を考えてるんだ・・・」

シャワーを終えた僕は着替えを済ませ、教室へと向かった。

教室へ戻ると紺野君は隣の席の生徒とお喋りをしている所だった。

僕に気づいた彼は向き直り、

「お帰り、シャワーどうだった？」

僕は彼の顔をまともに見れなかった。

『ボクハオマエニヨクジョウシ、アタマノナカデミダラナコトヲシ
タんだゾ』

「ああ・・・、汗流したらスツキリしたよ。」

僕は変な罪悪感に苛まれながら、席へと着いた。

お昼休みは疲れもあって、席で熟睡していた。

シャワーで精通するという精神的なショックと、

彼に欲情したというダブルショックで、立ち直るのに時間を要した。

午後の授業はなんとか持ち応えたけど、紺野君の顔が未だに直視出来ないうでいた。

「おい、仲原。な か は ら ッ」

背中をポンツと叩かれる感触で我に返る。

田中と熊井だった。

「お前、プール掃除からおかしいぞ。」

「あー、疲れたんだよ。」

僕は何とか悟られまいと必死になっていた。

「これからファミレスで涼んで、コミケの計画立てようと思ってるんだけど

一緒に来ないか？」

コミケ・・・そうか、もうそんな季節なんだな。

すっかり忘れていた。

「チケットもう取ったんだし、どう巡るか計画しとかないと

お目当てのグッズが取れなくなるぞ？」

田中は勉強そつちのけでその事しか頭に無いらしい。

「今日は勘弁してくれ、帰って寝たい。その話なら明日にしてよ。」

僕がテコでも動かないと悟った彼らは

ブツブツと文句を言いながら教室を出て行った。

周りを見渡すと、教室は僕一人になっていた。

さて、帰ろう・・・。

玄関の下駄箱まで来た時、僕の靴箱の横で紺野君が立っていた。

「あれ、先に帰ったと思ってたよ。」

相変わらず直視出来ない。

「なんで僕の目見てくれないの？あれから全然かまってくれないじゃない。」

まるで機嫌を損ねた女子高生みたいで、不謹慎にも笑いが込み上げる。

「プツ、一瞬JKかと思った。」

「コラッ、それ失礼だよ。」

と言いつつ、彼も笑い始める。

「ごめん、今日はいろいろあり過ぎて疲れたんだよ。」

「怪しいなあ。正直に言わないと一週間口聞いてやんないの刑だらね。」

『ボクハオマエニヨクジョウシタンダゾ』

あんなこと言える訳ないじゃないか・・・。

彼の顔を見た瞬間、またあの感情が蘇ってきた。

ああ、やめてくれ、僕に近づかないでくれ・・・

「何も無いよ、ほんと。本当に疲れたただけだつて。」

「じゃあ、帰ったらちゃんと休んでね。」

「うん、判ってるつて。」

「僕はこれから病院へ行くから、夜にでも電話するね。」

「病院つて、まだ何かあるの？」

「大丈夫、薬を取りに行くだけだよ。」

「うん、了解。夜なら大丈夫だと思うよ。」

彼は病院へ向かうバス亭へと向かって行った。

『今日の僕はどうかしてるな・・・』

部屋に帰った僕はベッドに倒れ込んだ。

どれだけ寝てたんだろう。

携帯電話の鳴る音で目が覚めた。

「・・・もしもし、」

「あ、ごめんなさい。起こしちゃったかな？」

紺野君からだ。

「大丈夫、さつき目が覚めた所だよ。」

「あのね、夏休みは一緒に海に行ってみたいなあ。」

「そっかー、海かあ、みんなで行くのも悪くないな。」

「えー、二人きりじゃないのー？」

「おいおい、二人はマズイだろ。あいつら連れて行かなかったら二学期は文句タラタラだよ？」

「そうだね。じゃあ計画立ててみんなでキャンプとかするっていうのもいいよね！」

「キャンプか、いいねえ。よし、明日お昼に話してみよう。」

「うん。一緒に思い出作ろうね。」

「あはは、なんか照れるなあ。でもあいつらと一緒にだったら変な意味で思い出に残るかもね。」

あ。でもちよつと待て、紺野君泳ぐ気なの？」

「泳ぐなんて無理だよ、みんなの前で水着姿になれる訳ないじゃない。」

「それはそうだ。バレたら大変な事になるよね。」

「じゃあ、決まりだね。仲原君も今日は疲れたと思うから、ゆっくり休んでね。」

「ありがとう、飯食ったら大人しく寝るよ。」

「じゃ、おやすみー」

「おやすみー、また明日ね。」

僕は彼が受話器を置くと同時に電話を切った。

今日は顔を見なかったらちゃんと話せたのにな・・・

やっぱり僕は変だ・・・。

僕は食事をしに階下へと降りていった。

思春期（後書き）

感想を頂けると、作者は小動物の様に喜びます。
また、連載の励みともなりますので、どうぞ宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8597d/>

そして僕は途方に暮れる。

2010年10月8日22時31分発行